

# 『過程』沼にハマった過程

定期試験前のこんな怪談がある。勉強をしていたはずなのに、ふと気付くと、無意識下で始めていた部屋の大掃除が完了しかかっている。あるいは、なぜか長編漫画を最終巻まで読み終わっている……。この種の怪奇現象には、明校にだけ伝わるものがあるのをご存じだろうか。そう、試験の攻略法が書いてあるかもしれないという謎の予感に惑わされ、試験前に『過程』を読み込んでしまうというコワイ話。

明校生とは切り離せない『過程』。歴代屈指の『過程』オタク2人に、沼にハマった過程、沼から出られなくなった過程を、縦横無尽に語ってもらった。『過程』オタク選手権があったら、トップを争うであろう**坂本駿太**さん（2015年卒）と**津島聖也**さん（2024年卒）。『過程』オタクの聖地でもある明大中央図書館（駿河台）の明大文庫で、バックナンバーを全て借り切って（館内閲覧のみ可）、いざ開幕！



2025年10月1日  
総明会広報委員会  
『M』編集部会

◆余はいかにして『過程』オタクとなりしか  
**坂** 『過程』オタクというアイデンティティを持っています。高Ⅱから『過程』編集委員を務め、高Ⅲでは委員長もやりました。卒業から10年経った今でも、『過程』の制作過程に関するデータは全て残してあって、『M』編集部会に入ったのも、第1号を読んだとき、「オトナの『過程』」というキャッチコピーを見て、「僕のあずかり知らぬところだ」と名を付くものが作られている……だと？」と思ったからです（笑）  
**津** 私は高校3年間、編集委員をやっていました。あとで説明しますが、歴代『過程』の企画はかなり分析しています。Ⅲ年次は委員長で、その年度が『過程』史上初のフルカラー版です。  
**坂** まずは『過程』との出会いから。中学入学時に配られた大量の書類の中で、『過程』だけが異彩を放っていました。これは捨てちゃいけないやつだと思って。分厚いから新入生向けの冊子と勘違いしましたが、その後毎年度配られるという（笑）高Ⅱのとき、昼食食べるのに友人についていたら、そこが編集委員会の教室でした。編集委員ってなれるもんなんだと気付

き、委員になりました。  
**坂** もともと『過程』は単年度プロジェクトですが、その頃は後輩に「つなげる」ことを意識して、部活っぽくなっていた時期でした。先輩から「来年度の委員長は多分お前だから」ということで、高Ⅱで副委員長を任された。「つなげる」ために、中学生委員を入れたのも、僕たちの代ですね。  
**津** 私も中1から『過程』が好きだったんですが、中3のときはコロナ休校だったので委員の募集がなくて、その年度は高Ⅲだけで『過程』を作ったんですね。だから高校生になったとき、『過程』のノウハウを引き継いで下さる先輩がいなかった。生徒会長名義で委員の募集があつて、私も委員になりました。先輩から後輩に「つなげる」流れが途切れてしまったので、歴代の『過程』を詳しく分析したいといけなかったわけです。  
◆『過程』が創る記憶  
**坂** 「つなげる」と言えば、『過程』自体、記憶を「つなげる」ものでもありますよね。僕は今、他校で教員を務めているのですが、普通は生徒とは3年か6年の関係で終わってしまうので、新しい学年を持つときには、自分をまた一から見せていかないとけない。でも明校の場合は、



歴代『過程』で机を囲み、机の上には『過程』のバックナンバーが並べられている。2人が机を囲み、机の上には『過程』のバックナンバーが並べられている。

『過程』によって、先生とかに関する（直接体験してない）記憶が引き継がれていくんです。勤務校でもいつかやってみたいなあと思いますね。「明校語録」の話したら、教え子たちもやりたいて言っていました。  
**津** 先生方の愛称とか、「明校語録」の知識を利用していく再生産のプロセスがありますよね。『過程』には、広い意味での「過去問」的な要素があるとも言える。だから何となくテスト前に読んじゃうんですよね。移転からだいぶ経っても御茶ノ水探訪企画がよく載るのは、「明校語録」だけで知ってる「男坂」とかを追体験したいという面があるからじゃないでしょうか。『過程』が歴史認識を形成してる。

## Interview 吉川末恒先生 自ら「縁」を紡ぐ

2021年度に明校を定年退職された吉川末恒先生（国語科）は現在、東京・下高井戸の身代り不動尊東京別院にて、筆耕職として勤務されています。未知の世界へ「再出発」された先生の日々に迫ります。



▲神田書学院にて、毎週提出していた課題

思わぬオフアールの背景は、書道師範資格を取得していたことから。猿楽町校舎時代、中学書写を受け持ったために、国語科を代表して神田書学院に通った。退勤後の講義参加や毎週の課題提出など、校務との両立は決して容易ではなかった。それでも、持ち前の強い好奇心が資格取得、そしてのちの再就職の道を切り拓いた。

「まだまだ勉強途中です」。そう微笑む吉川先生の、穏やかながら熱のこもった語りは、かつて明校で聴いたものと全く変わっていないかった。31年間教壇に立った明校を定年退職して半年経ち、何もしない隠居生活に耐えられなくなってきたある日、一本の電話が鳴った。その内容は、登録していたハローワークから「寺院の筆耕職をやってみないか」というものだった。

※ 筆耕職：毛筆で文字を書く仕事。寺院では、御朱印の墨書きなど。

「これは面白いかも」。そう思っ



▲御祈願を手伝う吉川先生

吉川先生には、そうした日々の仕事の全てが、学びに通じるという確信がある。御祈願では、読経する「先生」（僧職）の隣で、太鼓などを打つ。もちろん初めはなかなか上手はいかなかった。しかし、毎日続ける中で、少しずつ進歩していくことを目指した。その根底にはやはり、止まらない好奇心があった。時間があれば写経をし、分らないことがあれば「先生」に尋ねる。学術的なことについては、明大の図書館まで赴いて調べる。「日々新しいことを学ぶのが楽しくてしょうがないんです」。

を「つかまえる」ことではじめて、「縁」として立ち上がってく。例えば、資格取得も、再就職も、最後は吉川先生が自ら決意した。それが、湧き上がる興味とことん追究する現在の生活へ結びついていく。そして、その「縁」を参拝者に提供するのが自らの仕事となった。

いま、教え子たちに伝えたいこと、それは「師を持て」。一人で何でもできるというのは、もはや妄想に過ぎない。自分より高みにある存在は、今まで気づきもしなかったことをもたらす。未知の世界に飛び出すことは、怖さもあるが、だからこそ、新しいものが構築できるようになる。

自らの手で「縁」を掴んできた吉川先生の、常に相手を見つめて寄り添う日々は続いていく。

※取材にあたり、身代り不動尊大明王院東京別院の皆様の御協力を賜りました。記して御礼申し上げます。

執筆・取材：津島・坂本（幸）  
デザイン：藤木

## すべての物事は、表裏一体！

朝は必ず愛犬に起こされるという先生は、「飼っているようにみえて、じつは飼われているんですよ」と笑う。こうした一言にも、他者の存在がはじめて、なりたいたい自分になれるという先生の信念がにじみ出ている。



お久しぶりです！  
(工藤美知雄先生)

# 付属への過程

## 日本学園中高から 明治大学付属世田谷中高へ

2026年4月、日本学園中高（最寄り駅は明大前）が明治大学付属世田谷中高として新たなスタートを切る（◆1）。付属化・共学化の発表後、受験界隈から大いに注目を浴び、高校説明会の予約枠は6分で埋まったほどだった。同校の**工藤さやか先生**（情報推進部長）、**工藤美知雄先生**（2012年度まで明治中高英語科非常勤講師）にお話をうかがった。

※ ちなみに、両先生は縁戚関係にはありません。

執筆：林田 取材：林田・三浦

地域教育連携が始まった2012年から系列校協定締結までの10年間で、創立年の近さや教育理念の合致を背景に、付属化へ向けて動き出した。理工学部・田中友章教授の研究室と連携して3Dスキャナーを使った校舎の記録・保存活動もしている（◆2）。当初何から準備を始めて良いかわからなかったそうだが、学校法人明治大学・学校法人日本学園系列校合同協議会小委員会教学分科会委員として、明治高校教頭の**関根正人先生が何度か日本学園を訪れ、付属化・共学化に関する研修を担当された**そう。今でもその交流は続いているという。

**現在は新校舎も建設中**。現校舎のリフォームも重ね、今夏から段階的に引越していく。「**ランチ&スタディールーム**という食堂兼自習スペースには、大きなスクリーンが設置され、大学から遠隔講義をしたり、生徒が作成する動画を流したりと活用方法は多岐にわたる予定（◆3）。屋上からは明大も見え、生徒たちの大学進学への志も高まりそうだ。

**男子生徒の制服はブレザーのまま、エンブレムとネクタイが変わる（◆4）。女子生徒はネクタイ・リボン、スカート・スラックスが選べるブレザースタイル**だ。明大のイメージで学ランも検討されたが、在校生と新入生の間で差が出ないように配慮されたデザインに。日本学園独自の**カリキュラムに「創発学」（◆5）**がある。「社会に出てからいかに自己実現し、周囲に幸福を与えるか」とい



何と！  
登録有形文化財（建造物）の校舎！

うことを念頭に置き、そこに至るまでを逆算していく教育だ。たとえば、高1では「1DAY創発」が行われる。**丸一日自由に使い、興味があることを生徒一人で体験しに行く**のだ。テーマ決めや行動計画といった準備は2学期から始まる。埼玉県鹿野線を歩く計画を立てたある生徒は、なぜ線路を再活用しないのか疑問をもっていたそうだ。実際に歩いたことで、周囲の環境を知り、再活用への課題が見えたという。他にも、好きな洋菓子店の社長へインタビューする生徒や、寺で修行をする生徒など、ユニークな発想と具体的な計画を各々実現させている。付属化・共学化に向け、この創発学に「**教育の柱（ブランドデザイン）**」が加わっていく（◆6）。

先生方曰く共学化に「浮足立っている」男子生徒たちではあるが、一方で**最後の男子校を楽しもうという風潮**もある。ここ10年続いた「The男祭」という文化祭の愛称も今年が最後。慣れ親しんだ校歌や「日本学園創立100周年記念学園歌」も歌われなくなるだろうとのこと。同窓会（梅窓会）の方々も、立地

坂 話は変わりますが、『過程』の面白さってどこから来るんでしょう。先生方のフードファイト（たとえばバケツプリン）とか考えると、学校という日常の中で、非日常的なことをやるからって側面もありますよね。たとえば文化祭って、学校と別の会場でやっても盛り上がりがないと思うんです。もちろん別会場の方が制約はないとは思いますが、それと同じように、あ

### ◆制約は最高のスパイス

また、私が高Ⅲのとき、「生徒アンケート」の企画では、1票の回答まで全て掲載しました。

津 教員紹介をやりたくて入った方もいて、その方は熱意がありすぎて、前代未聞の「教員紹介だけのあとがき」を書きました（笑）。「明校語録」には、定番で残す言葉と、参加型の全校アンケートで募った新しく入りたい言葉、あとは委員が新しく入りたいと思った言葉がある。



『過程』オタクあるある。6年間しか在籍していないはずなのに、なぜか10年分くらい持っている（写真は坂本さんのコレクション）。

津 あとは、くやしけれど予算の中でやってるから面白いってところはあるんですね。通るかどうかのギリギリを攻めて企画を出すのも含め、制約との戦いが面白さを生んでる。

坂 それで言うと、僕が一番好きなのは、『過程』の後ろの方のページで、その年度のボツ企画を紹介するコーナー。恒例企画は結局、毎年度通ってきたから今回も通るっていう企画なわけなんです。そういう意味では、むしろボツ企画にこそ、その年度の新しいさがあります。最終的にボツ企画コーナーに載せたいたがた

めに、絶対通らないと分かっても提案だけはしてみた企画とがありましたね。お菓子の家を作る企画、試算してみたら何と30万円……（笑）

### ◆『過程』にとって「新しさ」とは何か

坂 これがなくなったら『過程』じゃなくなってしまうという根本の要素は、「何か面白いこと、新しいことをやってやろう」というスピリットだと思ってます。だから、ボツ企画コーナーに思い入れがあるんですね。

津 関連して、私が大事だと思うのは、その年度の『過程』ではその年度の雰囲気を出してほしいってことです。次年度以降に通じなくても良いので。私の在学中に学校で全館停電というハプニングがあったんですが、その年度の「明校語録」には、来年度消されても良いからとにかく【停電】を入れたいと。

坂 そういう意味では、後輩たちにずっとスピリットが伝わっていて嬉しいです。

津 『過程』の誌面に載るのは、普段の学校で書くようなタイプの文章じゃないので、『過程』の企画・編集過程で初めて発覚する同期の才能とかもありますよね。『過程』じゃないと出来ないことが、やっぱりたくさんあると思ってます。

執筆：三浦・坂本（駿）・津島

## 『過程』オタクが選ぶ

## 愛すべき推し記事たち

坂 記念すべき最初の「明校語録」（40号の「ア・メイジ・インゴ・ストーリー」）、最初の単語は、「あべ【仁義】」でした。同じ号では、『過程』廃刊に反対しようとかも書いてある。転換点となる号です。

津 1号に『過程』という名称の意味が載っているのは、やっぱりアツいですよね。

津 攻めた企画で言うと、46号の「授業再考」とか。坂 ちなみに、もつとあとの「定期考査の出題傾向」企画はボツになりました。

坂 30号には、先生方の幼少期の写真が載っていて面白いんですよ。

津 バブル期までの定番コーナーと言えば、「高Ⅲ最後にもの申す」ですね。

坂 初めてカラー写真が入ったのは、多分41号でしょうか。

津 中1のときの栗野先生が、林間学校の感想を書いている大変貴重な号がありましたね……。

坂 先生方に少しでもだけた質問をしだしたのは、いつ頃からなんでしょうね。

津 32号だともう結構くだけてますね。

坂 64号の羽田圭介さんの記事には思い入れがあります。当時大学生でしたが、どうしても羽田さんにお会いしたくて、企画書を書いて後輩に託した記憶が（笑）結局日程が合わず出席出来ませんでした。記事化したことに妙な満足感がありました。

津 30号、40号、60号、70号といった節目の号は、『過程』の過程を振り返っている場合が多いんです。

| 『M』編集部会メンバー |     |     |        |
|-------------|-----|-----|--------|
| ◇           | 林田  | こすえ | 2011年卒 |
| ◆           | 高橋  | 凌士  | 2011年卒 |
| ◇           | 三浦  | 直人  | 2011年卒 |
| ◆           | 朝倉  | 貴紀  | 2012年卒 |
| ◇           | 土屋  | 弦   | 2014年卒 |
| ◆           | 岩田  | 澪夏  | 2015年卒 |
| ◇           | 坂本  | 駿太  | 2015年卒 |
| ◆           | 塩出  | 研史  | 2015年卒 |
| ◇           | 垣   | 日菜子 | 2016年卒 |
| ◆           | 高波  | 茉生  | 2016年卒 |
| ◇           | 井畔  | 杏里紗 | 2018年卒 |
| ◆           | 橋本  | 大輝  | 2018年卒 |
| ◇           | 小林  | 麻衣  | 2019年卒 |
| ◆           | 津島  | 聖也  | 2024年卒 |
| ◇           | 坂本  | 幸生喜 | 2024年卒 |
| ◆           | 藤木  | 優弥  | 2024年卒 |
| アドバイザー      |     |     |        |
| ○           | 石曾根 | 毅   | 2015年卒 |
| ●           | 山田  | 豊大  | 2015年卒 |

記事中の◆印：下記のQRコードから、関連するウェブサイトを開覧することができます。



◆1 ◆2 ◆3 ◆4 ◆5 ◆6 ◆7